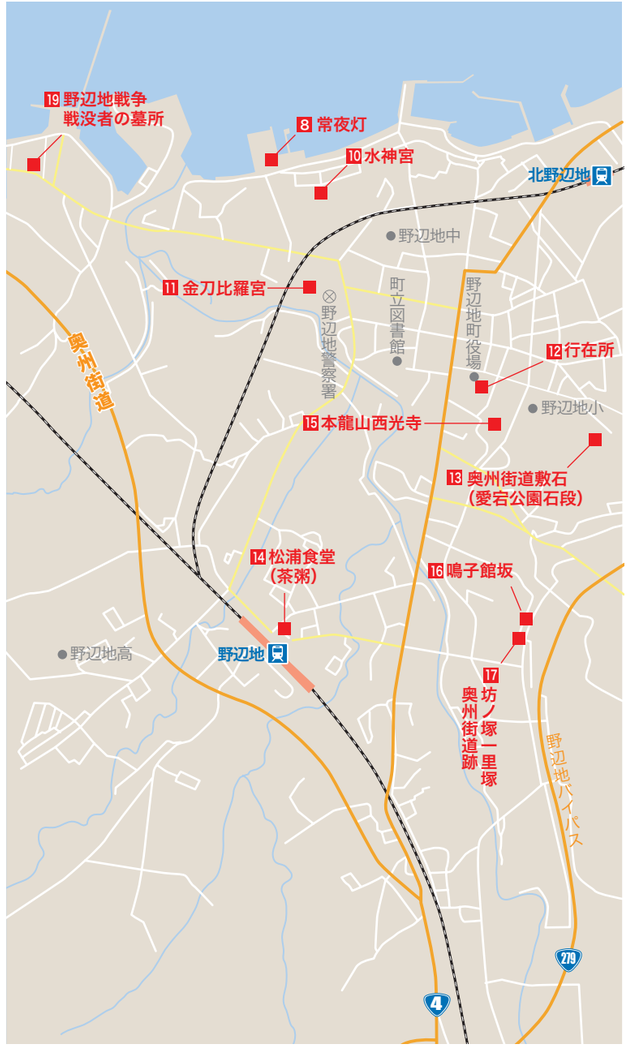

北前船の道【野辺地】

奥州街道は、少なくとも花巻より北の旧盛岡領については、江戸へ向かっていたのではありません。むしろ、野辺地湊との往来で、大いに賑わっていました。野辺地がこの領内でもっとも大きく、もっとも重要な湊だったからです。銅や大豆に扁柏(ひば)と俵物が、野辺地湊から積み出された主要な産物でした。その一方で、さまざまな商品や文化が、この湊から盛岡領にもたらされました。野辺地の街には有力な廻船問屋が生まれ、町衆の力が育まれていきます。明和から文化年間(1764〜1817)の『野辺地町之図』(十和田市教育委員会所蔵)によれば、浜の番所の裏手に御用銅の蔵がありました。安政から慶応(1854〜67)にかけて作られた『野辺地町之図』(十和田市教育委員会所蔵)には、この浜に銅や大豆の蔵が見えます。本町から金沢町・新町にかけては、大きな商家が並んでいました。名前の書かれたものだけで11軒。幕末に描かれた『北奥路程記』(盛岡市中央公民館所蔵)には常夜燈から東へいくつもの「ハマクラ」が書きこまれています。

清水川・狩場沢の街道

清水川・狩場沢の街道は、浜伝いの道が続く。南部地方で盛んな畑の豊作祈願「虫追い」も、平内の各地で行なわれているなど、この土地は街道を伝わる文化の接点でもあった。

土屋御番所跡 1

この番所を境に、浅虫は弘前領、土屋から狩場沢(かりばさわ)までが黒石領となっていました。

天明飢饉供養塔 2

天明2〜5年(1782〜85)の大飢饉で、平内(ひらない)では375戸が空家となるほどの餓死者がありました。この供養塔は、天明7年(1787)に東福寺の住職が建てたものです。供養塔は、奥州街道沿いに、小湊(こみなと)の集落のはずれに建っています。日本人は、街道がこの世とあの世の通路だと考えてきました。

明治天皇御休処 3

明治9年(1876)7月14日、明治天皇が東北を巡幸した折ここで休息しました。明治天皇の巡幸は、明治初めの庶民には、大きな事件として受け止められていました。今日の国道の基礎は、このとき街道を整備したことから始まっています。

平内代官所跡 4

小湊の代官所は、安永4年(1775)に設けられました。平内は、明暦2年(1656)に黒石領が弘前領から分かれると、黒石領の飛地となります。このため、代官所のあった小湊には、ねぶた祭りの原型が受け継がれるなど、特徴ある文化が伝わっています。

御家中の松・御家中の欅 5

代官所の周りには武家屋敷があって、「御家中」と呼ばれています。ここには、室町時代の欅、戦国時代の松など古木が残っています。

雷電宮 6

はじめ南部地方のいずれかの地に建立され、何時のころにか東岳に祀られました。東岳は修験の一大勢力でしたが、その社寺が離散したときに東岳から遷り、さらにまた文禄2年(1593)の洪水で現在の地に流され、あくる文禄3年に福舘城主七戸隼人がこの場所に遷座した、と伝えられています。

浅所海岸　白鳥飛来地

正面

大沢遺跡 7

この遺跡は、平安時代(10世紀後半〜11世紀ころ)の製塩遺跡として知られています。ここでは、製塩に関わる土器のほか、平安時代の製塩炉跡が4基検出されています。このほかにも、近世の製塩窯跡などが検出されています。

藩境塚 8

野辺地の馬門(まかど)と平内の狩場沢の間が、南部と津軽の境でした。盛岡・黒石両藩の境に二俣川という小川が流れています。奥州街道はその河口の浜で、この川を渡ります。浜伝いの道に沿って、二俣川を挟んで南部の馬門側に2つ・津軽の狩場沢側に2つ、奥州街道の左右にそれぞれ塚が作られました。合わせて4つの塚だから、通称は「四ツ森」。塚は直径が10メートル、高さが3メートル半の小山で、正保2年(1645)の『陸奥国津軽郡之絵図』にも描かれていますから、少なくとも300年以上前にはすでにあったことになります。この塚の上に、かつては狩場沢・馬門の両集落が虫追いの人形を祀っていました。それぞれの藩は、この関所に番所を設けていました。

常夜灯 9

浜町の常夜灯は、文政10年(1827)に建立されています。施主は「野村治三郎」、輪鼓一の5代目当主です。天保6年(1835)に盛岡の松羅堂が発行した『御国中分限番附』では西の関脇、南部でも有数の豪商でした。4隻の千石船のほか、500石以上の船を3隻擁していました。

その野村治三郎に並んで、「世話人」として橘屋吉五郎の名が刻まれています。橘屋は讃岐国塩飽島の船主で、南部の大豆や鰯〆粕を大坂まで運んでいました。瀬戸内海の塩飽諸島は古来水運の要でしたが、江戸時代、ここには数多の船主・船頭・水夫がいました。吉五郎の名は、野辺地代官所の『大豆魚粕御勘定帳』(天保14年=1843)や『御大豆仕切勘定帳』(嘉永4年=1851)・『大豆御勘定控帳』(嘉永5年)のなかに見えます。野村治三郎とは大豆を巡って取り引きがあったのでしょう。西廻り航路の船主が湊の商人とともに、航海の安全を願ってこの灯籠を建立したのに違いありません。

水神宮 10

常夜灯のある浜町の高台に水神宮という社があります。その丘の麓に滾々と清水が湧き、今でも近所の家々が使っています。航海に水は必需品でしたから、北前船に積む水を汲むこの場所に神を祀ったのでしょう。野辺地八幡宮に遺る記録によれば、水神宮を勧請したのは箱館の高田屋嘉兵衛、世話人は野辺地の船大工・五十嵐彦兵衛、文化5年(1808)のことです。

金刀比羅宮(野辺地八幡宮内) 11

野辺地の廻船問屋・仙台屋安田彦兵衛が、文政5年(1822)に寄進したものです。仙台屋は、野辺地で俵物を一手に取り仕切っていました。また、棟札によれば、大工の棟梁は盛岡の畠山清八。桁行き一間・梁間一間の「一間社」(いっけんやしろ)の本殿は、切妻平入りの前流れを長く伸ばした「流れ造り」で、屋根は柿葺き(こけらぶき)。柱に昇り龍・降り龍の彫刻が施されています。

御用銅や御為登(おんのぼせ)大豆を積んだ雇い船は、長い船旅の過程でしばしば海難に遭い、およそ3年に1艘は海に沈んでいました。人命と財産を失わぬよう、湊の商人がこの金毘羅を勧請したのでしょう。なお、この祠の5年後に建立された浜町の常夜灯にも背に「金毘羅大権現」と刻まれています。

行在所(あんざいしょ) 12

明治9年(1876)に明治天皇が東北を巡幸した折、6代目野村治三郎が新築した離れが、天皇の行在所(あんざいしょ)として使われました。明治15年の巡幸に際しても行在所となりましたが、明治23年の大火で焼失。現在の建物は、大火の後に同じ様式で再建されたものです。

明治天皇の巡幸に伴って道路が整備され、馬車や騎兵の行列を目にすることで、地方の民衆は具体的に文明開花に触れることが出来ました。

奥州街道敷石(愛宕公園石段) 13

野辺地の愛宕山は、この湊街を見下ろす丘になっています。その登り口に、真夏も涸れない清らな水が湧いています。明治9年(1876)に天皇が巡幸した折、飲み水に供したことから、「御膳水」と呼ばれています。

この清水の右手を上る階段の石は、かつて町内の奥州街道に敷き詰められていたものです。弘化から嘉永にかけて(1844〜54)、野辺地の廻船問屋・輪鼓一野村家の6代目治三郎が、大坂から御影石(花崗岩)3000本を取り寄せて本町の通りに敷き詰めたのです。道という道が舗装されるようになったのは高度成長期からで、それ以前のわが国では往来の激しい主要な街道ですら、雨が降ればぬかるむところも多かったのです。そこへ、北前船の湊らしく、弁財船で運んだ石を敷いたのでした。

茶粥 14

日常に茶粥を食する文化の北限は、おそらく青森県の野辺地です。それも「決明(けつめい)茶」を用いるという変り種。西廻りで来た弁財船が、この湊にさまざまな文物をもたらしました。そのひとつにお茶もあります。茶粥を食べる野辺地の風習は、茶を商う大店が持ち込んだものだといわれています。野辺地駅前の松浦食堂で予約すると食べることができます。

炒ったカワラケツメイ

本龍山西光寺の枝垂桜 15

本龍山西光寺に、樹齢およそ300年といわれる枝垂桜があります。檀家である野辺地の廻船問屋・山一野坂勘左衛門が、延享2年(1745)に大坂から取り寄せて植えた、と伝えられています。青森県内の枝垂桜では、弘前天満宮のそれに次ぐ古木です。

鳴子館坂 16

鳴子館は平安末から鎌倉にかけて集落のあった場所で、この坂を下りれば野辺地の街です。幕府や藩の要人が野辺地を訪れた際、街の重立(おもだち)が奥州街道本道のこの坂まで迎えに出ました。

坊ノ塚一里塚・奥州街道跡 17

野辺地へ北上する奥州街道のうち、中野から野辺地まで本道と近道は分かれ、この山越えのある東側の道が本道です。原野や森の中の道が多く、街道の跡がそのまま残り、史跡になっている箇所があります。坊ノ塚一里塚の辺りも、そのひとつ。

南部地方の街道には、一里塚がよく残り、岩手県一戸から野辺地までの一里塚は、土木遺産に指定されました。長者久保から鳴子館坂までの奥州街道本道は山中に入り、坊ノ塚の一里塚は、この道の半ばにあります。江戸日本橋から 179番目。古(いにしえ)の人がどのように歩いたのか体感できる森の道が残っています。

親巡蹟 18

明治9年(1876)7月13日、天皇が東北巡幸で野辺地へ向かう途中、ここで休憩し、その景色を絶賛しました。この平原のかなたに、目を凝らせば、野辺地の町と海が見えます。野辺地へ北上する奥州街道のうち、中野から野辺地まで本道と近道は分かれ、こちらのどちらかといえば平坦な西側の道が近道です。天皇の巡幸が近道を選ぶことで、のちの国道は近道の側に造られることになったのです。

野辺地戦争戦没者の墓所 19

野辺地戦争とは、明治元年(1868)9月22日の夜、小湊(平内)に集結していた弘前藩の兵1800人が、盛岡藩領の馬門(まかど)を襲撃した事件です。盛岡藩と八戸藩の連合軍がこれを迎え撃ち、弘前藩兵は40人余りの死傷者を出して敗走しました。

明治維新に際して、奥羽越列藩同盟を作って幕府方となっていた東北諸藩のうち、弘前藩・秋田藩は早くから官軍方についていました。盛岡・八戸の両藩は最後まで幕府方だったため、藩境近くで争いが起きたのです。弘前藩は、野辺地戦争の翌年、この地に死者27人の名を刻んだ4基の墓を建てました。戊辰戦争が本州の北端でも行なわれたことを知る、貴重な遺跡です。